

## 2013 年度 事業報告

### 公 1 事業 がん知識・がん予防の普及啓発活動

#### 【ピンクリボンフェスティバル】

乳がん啓発キャンペーン「ピンクリボンフェスティバル」は、東京・名古屋・神戸でスマイルウオークを開催した。名古屋以外は雨模様の中のウオークとなったが、東京で 4200 人、名古屋で 1000 人、神戸では 2900 人、計 8100 人が参加し、街をピンクに染めながらピンクリボンのメッセージを伝えた。仙台は 2 つの台風が接近していたため、やむなく開催を中止した。名古屋、神戸ではマンモグラフィ検診車による無料検診も実施し、数人の要精検者が出た。シンポジウムは東京、神戸で開催。1100 人を超える参加希望があった東京は、抽選で選ばれた約 750 人が来場し満席となった。専門医による講演のほか、乳がん看護認定看護師に専門医とは異なる視点から検診受診の重要性などを話していただいた。初開催となった京都セミナーでは乳がん啓発と合わせて、産婦人科医による子宮頸がんワクチン接種の考え方などについても情報提供を行い、300 人の満席となった。

フェスティバルの参加総数は 9700 人。企業協賛は 37 社（前年比 6 社減）、協賛金は 7750 万円（同 31%減）となった。13 年度は啓発映像制作を行う新プラン「ムービーサプライ」や、京都セミナー開催などを協賛メニューに加え、新規協賛先の獲得を図ったが、大口協賛の取りやめが響いた。

新年度は、イベントの運営方法を見直して支出を削減し、新規事業として「綾戸智恵ライブ&トーク」「関西セミナー」を開催、据え置きを続けてきたウオーク参加料の値上げなどにより増収を図り、運動のさらなる拡大を目指す。

#### 【リレー・フォー・ライフ】

がん患者を支援すると共に、がん予防への関心を高めがん征圧を目標とするチャリティイベント。13 年度は前年度と比べ 4 カ所増え、全国 41 か所で開催した。初開催地は青森県・八戸、神奈川県・相模原・みなとみらい、群馬県・前橋、大阪府・大手前、奈良県・橿原の 6 カ所であった。

総参加者数は 7 万 7 千人、全チーム数は 1673、サバイバーは 4300 人を数えた。全国の実行委員会に寄せられた寄付総額から経費を除いた分が日本対がん協会に寄付される。13 年度の協会への寄付額は 6851 万円と前年度比 24%の大幅増となった。寄付総額に占める協会への寄付率は 52%（前年度は 48%）に上昇、各実行委員会の経費削減、寄付増の努力が進んだ。

13 年度は多くの会場が悪天候に悩まされた。静岡、室蘭、芦屋、宇都宮、松本、奈良、上野など台風に伴う暴風雨の中、安全確保に最大限留意しながら無事に開催された。事故

なくたすきをつなぐ運営は特筆すべきであろう。

大阪の大手前では初めて公立高校を会場とすることが許され、若くしてがんで亡くなった同校生徒を同級生や多くの関係者でしのいだ。神奈川では県内4カ所開催となり、より身近なイベントになりつつあることが証明された。福島では4回目、宮城では5回目と復興途上の東北で命のリレーが継続された。

メディアの扱いも年々件数が増え、地方紙を含めると100以上の報道が掲載され、テレビ、ラジオでも20回以上紹介された。がん征圧のためのチャリティイベントという公益性の高さ、人々の関心を呼ぶリレーの魅力が一段と浸透した証左と見ることができる。

## 【その他の対がんキャンペーン】

### ①ほほえみ基金キャンペーン

13年度は患者支援に力を入れ新規事業として従来の患者向けセミナーに加え、心の癒しを重視したカラーセラピー、最新医療情報のセミナーを開催した。協会のFace bookを活用しほほえみ基金事業の内容を広く知らせる意味も兼ねて情報発信をこまめに行った。

5月12日(日)の母の日「Mother's Day Event～お母さん、乳がん検診に行つてね!～」を有楽町マリオン・ルミネパサージュで開催。乳がん、子宮頸がんの啓発を行い、来場者には特製はがきを用意してお母さんへのメッセージを書いてもらった。

受診率向上キャンペーンとして行っている協会オリジナルの乳がん検診無料クーポン券を総計12500枚(うち森永乳業提携分1500枚、千趣会1000枚)発行した。新聞でクーポン券プレゼント企画も実施し、当選者からは「このクーポンで受診した検診で、しこりが見つかった。まだ悪性か良性かは分からないが、今回受診してよかった」という意見も寄せられた。

また、ほほえみ基金からは「公2」事業の「検診機器整備等助成」、「公3」事業のがん相談ホットラインの一部の費用負担や、乳がん患者団体向けセミナーの費用なども拠出している。

### ②子宮頸がんキャンペーン

子宮頸がん検診で、一部支部の協力を得て進めてきたHPVテスト臨床研究事業は検査の実施を2013年度で終えた(2014年度以降は追跡調査等)。同テストの効果を調べる厚生労働省研究班の検証事業にも「研究協力機関」として参画した。ただ国の2013年度当初予算の成立が遅れた影響で、この検証事業も計画通りには進まず、2014年度も引き続き検査の実施をすることになった。

若い世代への子宮頸がん啓発では、従来進めてきた女子大生、若いママに加え、就職情報会社と連携し、20代、30代のOLを対象に活動を進めた。この世代のOLたちのメーリングリストの会員40万人を対象に情報を発信したり、東京と大阪でセミナーを開催したりした。

HPVワクチンについては、国は予防接種法を改正して定期接種の一つとしたものの、

副反応が社会問題化したこともあり、国は6月、積極的な接種勧奨を中止した。この方針に沿いつつ、少人数の親子グループを対象に「現時点」での正確な情報を丁寧に伝えることを心がけた。

検診に関しては、10人前後の若いママたちに「セミナー+検診」を実施するとともに、友達同士誘い合って検診に行く「ママ友検診」活動を進め、北海道、宮城県、福岡県各支部の協力を得てモデル事業を実施した。

### ③がん教育キャンペーン

がんの専門医らに学校を訪ねてもらい、がん教育の出前授業を行う「ドクター・ピジット」（朝日新聞社と共催）は2013年度、奈良県立大淀高校や長野清泉女学院中学・高校など9校で実施した。

文部科学省が日本学校保健会に設置した「がん教育のあり方に関する検討会」も2014年2月に報告書をまとめ、文科省は2014年度に全国十数校でモデル授業を行う予定を立てた。これを受け、各地の教育委員会もがん教育の導入を検討。2009年から先進的に取り組んできた対がん協会への問い合わせも増えた。

教育委員会と連携し、出前授業のモデルを開催し、養護教員らの研修の場にしてもらう新たな取り組みを企画。2014年2月に神戸市教委と一緒に「試行的」に実施した。

### ④フットサルリボン活動

がん罹患したフットサル選手、デウソン神戸・鈴木拓也選手、湘南ベルマーレ・久光重貴選手の申し出をきっかけに、下半期に「フットサルリボン活動」を立ち上げた。

目的の第1は、350万人といわれるフットサルファンに向けたがんの啓発。試合会場で協会のブースを設け、がん検診などの啓発リーフレットを配布したほか、乳がん検診の無料クーポン券を未受診で関心の高い方々にプレゼント、フットサルリボン基金への寄付を募るなどした。200円以上の寄付に対して新たに制作したシリコンバンドを配った。計14回のブース展開で合計60万円の寄付が集まった。Fリーグの12のチームに活動を説明してシリコンバンドを送ったところ、多くの選手が着用した写真を送ってくれた。

第2は、小児がん患者支援。Fリーグのセントラル大会に小児がん患者家族を無料招待した。来期以降も継続する。関東と東北の主だった小児病院に慰問を打診、第1号として東海大学附属病院への慰問が実現した。久光選手とJリーグの阿部伸行選手が病院の院内学級で親子でボール遊びをしたり、身体が動かせる子どもたちを集めてフットサルをしたり、病室をまわって個別に慰問したりした。家族や医師らからは「こんな笑顔を久しぶりに見た」など好評だった。

久光、鈴木両選手にはフットサルリボンアドバイザーに就任してもらった。試合会場での声掛け、チームへの呼びかけ、寄付集めの企業訪問、メディア出演時のアピールなどの活動を展開してもらっている。

関連して、小児がん患者支援アドバイザーを12月に発足させた。両選手のほか、宮城県立子ども病院の今泉益栄医師ら医療者側、小児がん体験者らで構成。小児がん患者は、闘病しながら進学や就職、恋愛や結婚に臨むハンディを抱える一方、母子家庭が多く治療

や学習に経済力困難も多いことなど課題が鮮明になった。

#### ⑤がん征圧月間キャンペーン

9月のがん征圧月間の中核的行事である「がん征圧全国大会」は9月14日に札幌市で開催した。その前日に開いた記念シンポジウムでは「乳がん検診」をテーマに、視触診の効果や超音波検査の有効性などについて、専門家が活発な討論を展開した。

#### ⑥禁煙キャンペーン

家庭や職場、飲食店での受動喫煙を減らすために、小学生とその親（保護者）を対象にした健康教室を夏休みの8月17日・18日で開催した。この企画は、朝日学生新聞社（小学生新聞）と共同で実施した。講師は山王病院副院長の奥仲哲弥医師で「親子でタバコについて考える」をテーマに授業を行い、2日間併せて40組、約100人の親子が講義を受けた。また、健康教室ではがん啓発アニメDVDの放映やたばこの知識テストを実施し、たくさんの小学生親子が立ち寄った。

毎年、恒例で実施している「禁煙コンクール」を13年度も株式会社法研の協力のもとで2回実施した。このコンテストは、厚生労働省主催の「第2回健康寿命をのぼそう！アワード」で優良賞を受賞し主催をしている当協会が表彰をされた。

#### ⑦国際対がん活動と連携した活動

国際対がん連合（UICC）との連携の一環として、UICCが定めた「世界対がんデー」（2月4日）に、UICC日本委員会と「がん教育」を主題にシンポジウムを三重県総合文化会館で開催、教員を含め500人が参加した。

### 【啓発セミナー】

#### ①乳がんセミナー

継続事業。企業とタイアップした「乳がんセミナー」を全国各地で16回開催し、併せて約1500人の方に乳がんの基礎知識、セルフチェックの方法を学んでもらった。

#### ②全国巡回がんセミナー

全国巡回がんセミナーは佐賀市（240人）と松山市（300人）、長野市（150人）の3か所で開催した。佐賀では立川らく朝氏が「健康落語」を講演し会場を好評だった。

## 公2事業 専門家・専門団体向けの支援事業

### 【助成】 <助成審査の一覧を付属明細書に別掲>

#### ①プロジェクト未来」がん研究助成

リレー・フォー・ライフに寄せられた募金をもとに、優れたがん研究に対して助成金を贈呈する「プロジェクト未来」は2年度目を迎えた。13年度の応募は全12件。医師や研究者、リレー・フォー・ライフのスタッフで構成された審査委員が膨大な資料をもとに厳正な審査を実施し、7名の研究が採択された。

前年度からの継続が3件。新規は4件。坪野吉孝氏（がんサバイバーの食事と運動に関

する最新研究の情報収集と情報提供の取り組み)、西村歌織氏(インターネットを活用したがん患者のための地域限定型コミュニティ結成と自助効果の検証)は、がん情報の有効な活用についての研究で、直接的な患者支援につながることを期待される。

## ②若手医師奨学制度

全国の拠点病院、医師会、全国がん協議会、日本対がん協会支部、研修機関先計 485 か所へ本制度の案内状を送り、加えて協会ホームページ、朝日新聞で募集の周知を行った。今年度新たな受け入れ病院に国立がん研究センター東病院が加わり 3名の応募があり選考した結果、若手医師 3人が 4月から希望する国立がん研究センター東病院、愛知がんセンター、がん研有明病院で半年間研修を受け、精度の高い医療を習得した。

米テキサス大学MDアンダーソンがんセンターで 1年間学んでもらう「マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞」の受賞者は昨年度に引き続き 2名、広島市民病院の河野美保医師、日本医科大学武蔵小杉病院の原野謙一医師に決定した。2人は 14年 6月以降に渡米し研修に入る。この奨励賞はリレー・フォー・ライフに寄せられた寄付をもとに運営している。

## ③検診機器整備等助成

ほほえみ基金から乳がんの検診機器整備や啓発事業に対して広く助成。13年度は青森県総合健診センターに「デジタルマンモグラフィ画像ビューア」、長野県健康づくり事業団、愛媛県総合保健協会に「乳房超音波診断画像装置」など 30団体に計 1500万円を助成した。

## ④患者会、がん啓発団体活動助成

ほほえみ基金から乳がん患者団体が実施する啓発イベントや企画に対して助成。13年度はクールカフェの「乳がん検診受診啓発じゅずつなぎプロジェクト」など 15団体に計 150万円を助成した。

## 【がん総合相談に携わる者に対する研修プログラム策定】

11年度から実施してきた厚労省委託事業。がん患者や家族などがピアサポーター(相談員)としてがん患者の相談にのるスキルを身につける研修プログラムを策定。研修テキストやDVDを作成した。研究機関や学会、がん拠点病院、患者団体、自治体などとも連携し、充実した内容になったと評価された。

研修事業の一環。がん患者や家族などがピアサポーター(相談員)としてがん患者の相談にのるスキルを身につける研修プログラム事業。厚労省から委託され 2年目になるが、プログラム内容を策定する「運営委員会」とプログラムや事業内容を評価する「評価委員会」を設け、計 11回の審議を実施。研修プログラムの試行版作成、試行版による研修実施と意見集約、試行版を修正し「がんピアサポーター編 これからピアサポーターをはじめの人へ」と題した研修テキスト、模擬相談 DVD、研修の手引きなどを作成した。成果物は都道府県自治体がん対策課やがん診療連携拠点病院(相談支援センター)、患者団体、協会支部など約 740か所に送付した。

また、9月 30日にはシンポジウム「考えよう! がんピアサポート研修プログラム」を東京・大阪を結んで開催。約 200人の参加者にアンケートを実施し、意見をプログラムに

反映した。

策定の進捗状況や成果物を広く周知することを目的に専用 HP を開設し、委員会議事録やシンポジウムの動画、研修テキスト、模擬相談 DVDなどを公開。また、試行版研修の様子や全国のがんサロンを紹介するレポートを掲載し、患者・家族の支援についての情報を発信し続けた。

### 【研修】

#### ①乳房超音波技術講習会

2月8-9日に公益財団法人結核予防会と共催で実施（於：結核予防会結核研究所）し、47名が参加。講義やハンズオン等の実習を終えた受講生は、日本乳がん検診精度管理中央機構が実施する実力評価テストを受けた。

#### ②保健師・看護師研修会

3月6-7日（於：有楽町朝日スクエア）に、日本対がん協会グループ・関連団体等に所属するがん検診に携わる保健師・看護師・事務員等を主な対象として開催し、90名が参加した。

#### ③診療放射線技師研修会

3月12-14日（於：結核予防会結核研究所）に公益財団法人結核予防会と共催して51名が参加。講義・グループ討論などを実施。受講生自身が撮影したフィルムを持参した評価では、評価リーダーによる熱い指導がみられた。

#### ④マンモグラフィ撮影技術講習会

3月21-23日（於：がん研究会交流センター）に実施し、49名が参加した。講義や読影・ポジショニング等の実習を終えた受講生は、精中機構（日本乳がん検診精度管理中央機構）が実施する実力評価テストを受け、A・B評価は35人だった。

## 公3事業 がん患者サポート事業

### 【無料がん相談事業】

#### ①がん相談ホットライン

13年度は相談員17人で対応し、相談件数は9699件、前年度比99.0%（-97件）。相談件数は前年度を下回り、複数回利用した相談者が25.7%、2494件（前年度は19.7%、1931件）と大幅に増加した。相談者は国内外に広がり、患者本人が最も多いが、家族、知人、医療機関の職員、職場の同僚など幅広い。

#### ②医師による相談

相談回数は年間計319回（面接107回、電話212回）にのぼり、1405人の相談に対応した。部位別で見ると面接は前立腺が一番多く、電話相談は乳腺、肺、大腸と続く。地区別では面接、電話とも共通して東京・神奈川・千葉・埼玉と関東が多いが、面接は遠方からの来訪もあった。また電話は海外6件（米国・中国・マレーシア・シンガポール）含め日本全

国からの相談を受けた。

#### 【患者団体向けセミナー】

- ①新規セミナー 心の癒しを重視したカラーセラピーセミナー、最新の医療情報をテーマにしたミニセミナーを開催した。9月のカラーセラピーセミナーのワークショップではサバイバー同士、体験談を語り合いながら、和気あいあいコサージュづくりを行った。1月の医療情報ミニセミナーでは愛知県がんセンター中央病院の岩田広治氏が「乳癌最前線」というテーマで講演を行った。質疑応答の時間を長く設け参加者から好評を得た。5月の母の日、11月の子宮頸がん月間に合わせ乳がんと子宮頸がんの患者を対象に美容セミナーを2回開催した。これら患者向けセミナーには延べ65人が参加した。
- ②患者のための美容セミナー 治療の副作用で生じる美容の悩みに応えるセミナーを資生堂の協力で開催し、女性がん患者全般が対象となる「並木通りセミナー」を実施。これとは別に、上記ほほえみ基金、子宮頸がん基金の事業としても開催している。

#### 【被災地のがん患者支援】

被災地のがん患者のためにウィッグやケア帽子などを送るワンワールドプロジェクトは13年も継続し、5月と11月の2回にわたり物資の募集を行った。この募集で個人・団体・企業を含め113件の物資が届き、ウィッグ98点、ケア帽子など467点が集まり、全国から寄せられた支援物資は被災地の病院へ送付した。

## 公4事業 がん研究支援事業

#### 【がん研究の成果の普及啓発を推進する事業】

第3次対がん10か年総合戦略事業の1つとして進めてきたがん臨床研究推進事業（2013年度が最終年）。厚生労働科学研究費でがん臨床研究を進める研究者による発表会と研修会を開催した。がん医療、がん情報の均てん化を進める国の方針を受け、研究成果を「患者や家族、一般市民に分かりやすく解説し、普及啓発する」「関連分野の専門家・がん医療従事者に普及させて地域の医療格差をなくす」という2つの目的達成に向け、対がん協会として国のアドバイスを受けながら進めた。

#### 【新しいがん検診のあり方について、調査、研究を支援する事業】

胃がん検診に関して、日本消化器癌検診学会の動きをみながら、「ABCリスク評価」の評価を進めた（2014年度も引き続いて実施）。ヘリコバクター・ピロリの除菌が進む動きがあることを受け、検診時の問診で除菌歴を尋ねて「その後」を追跡できる仕組みができないか等の調査を進め、当面、各支部の胃がん検診受診者を対象に、「除菌歴」を問診で尋ねてもらい、「除菌した人」と「除菌していない人」の検診結果を調査することにした。

子宮頸がん検診に関して、公費助成によるHPVワクチン接種対象世代が2014年に検診を受ける世代になることから、問診時にHPVワクチン接種歴を尋ね、検診の結果とリンクできる仕組みの構築に向け、支部に協力を求めた。厚生労働科学研究の分担研究でもあり、数年内に「ワクチンの効果」が検証できると期待される。

助成名称	助成内容	応募対象・助成数 (応募数)	助成決定先 (敬称略)	金額(計)
ほほえみ基金助成	乳がん検診機器整備、啓発事業助成	全国の住民検診実施団体 30件助成 (応募31団体35件)	北海道対がん協会、青森県総合健診センター、岩手県対がん協会、宮城県対がん協会、秋田県総合保健事業団、やまがた健康推進機構、福島県保健衛生協会、栃木県保健衛生事業団、群馬県健康づくり財団、埼玉県健康づくり事業団、ちば県民保健予防財団、かながわ健康財団がん対策推進本部、新潟県健康づくり財団、長野県健康づくり事業団、富山県健康づくり財団、石川県成人病予防センター、福井県健康管理協会、滋賀県健康づくり財団、兵庫県健康財団、広島県地域保健医療推進機構、山口県予防保健協会、とくしま未来健康づくり機構、香川県総合健診協会、愛媛県総合保健協会、高知県総合保健協会、佐賀県総合保健協会、長崎県健康事業団、大分県地域保健支援センター、宮崎県健康づくり協会、鹿児島県総合保健センター	1,500万円 =1件5万~200万円
ほほえみ基金助成	乳がん啓発活動団体のイベント、企画助成	全国の乳がん啓発団体、患者会 15件助成 (応募16団体)	ピンクリボン in Sapporo 実行委員会、ピンクリボンファミリー、いわてピンクリボンの会、やまがたピンクリボン運動実行委員会、リュバンローズ、山梨まんまクラブ、クールカフェ、奈良ピンクリボンアピール、ピンクリボン紀南、徳島乳がんネットワーク、ピンクリボンかがわ県協議会、ピンクリボンえひめ協議会、いぶき会、あおぞらの会、ピンクサポートチーム「ピンクフレンド」	150万円 =10万円×15件
奨学医助成 ① (13年度実施分)	研修のための奨学金	若手がん専門医 3人(応募3)	砂川秀樹、楠元英次、佐藤高光	300万円 =100万円×3人
奨学医助成 ② (14年度実施分)	研修のための奨学金	若手がん専門医 2人(応募2)	村上幸祐、稗田信弘	200万円 =100万円×2人
マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞	米国テキサス大学MDACCで研修	若手がん専門医 2人(応募3)	河野美保、原野謙一	400万円 =200万円×2人 プラス交通費
地域ボランティアの組織化	がん患者支援のボランティア活動	全国のボランティア組織 3件(応募3)	在宅ホスピスケア ボランティア「さくら」(代表 中村克久)、「えがお」タオル帽子工房&相談室(代表 小野寺幸枝)、一関在宅支援ネットワーク「IZAK」(代表 佐藤隆次)	135万円 =50万円×2、 35万円×1
プロジェクト未来研究助成	有力ながん研究	全国のがん研究者 7人(応募12)	岡本康司、片桐豊雅、清水研、清水重臣、坪野吉孝、西村歌織、吉田清嗣	1,500万円 =1人100万~300万円

上記は「助成対象の審査に関する規程」に則り、日本対がん協会の助成審査委員会(委員長は理事長)で審議され決定した助成の一覧。